

〈論文〉

## 日中両国間の辞賦文学研究の差違について —21世紀以降を中心に—

栗山 雅央

### 前 言

本稿は、日本と中国の辞賦文学研究、とりわけ21世紀以降の状況について、その差違を幾つかの観点より概観したものである。というのも、筆者は大学院進学より中国に固有の長篇の韻文形式である「辞賦」に関する研究に従事してきたが、その当初はこれを研究対象とした学会発表や論文を見かけることがさほど多くなかった。そのために、日本の辞賦研究は長く停滞期にあったと認識していたが、それが中国では当てはまらないということ、2011年から2013年に中国の清華大学へ留学したのを機に気付かされたのである。留学中には中国国内で開催された『文選』と「辞賦」に関する国際学会に参加する機会を得たが、本稿が主な対象とする辞賦については、第九屆国際辞賦学學術研討会で日本の研究状況との違いを痛感させられた。これは第十二・十三屆と回を重ねる毎により明瞭なものとなった。その違いを端的に示すならば、次のように言うことができよう。すなわち、日本では六朝時代以前の辞賦のみが主な研究対象と看做されるのに対し、中国においては唐宋より民国時期に至るまで幅広く対象とされているのである。

日本の学界は、王国維が提唱するところの「一代有一代之文学」に同じく、楚辞・漢賦・六朝駢文・唐詩・宋詞・元曲などが各時代の研究対象として捉えられ、とりわけ唐詩に対する研究を中心に進められてきたと理解してよい。そのため、六朝以前の辞賦は深く注視される一方で、唐宋以後の辞賦研究は等閑視されてきたのである。

では、このような日本と中国における辞賦の研究状況の差違は、より具体的にはどのような点に求めることができようか。筆者は試みに以下の観点、すなわち「通史と断代」、「広汎と狭小」、「辞と賦」、「整理と未整理」などから分析してみたいと考えている。これらの比較を通じて、まずは各国の辞賦研究状況が備える特徴が理解できるのではなかろうか<sup>①</sup>。

なお、21世紀以降の研究状況を主な比較対象とすることから、近年の研究成果を提示する必要性も生じてくる。そのため、今世紀以降の日中両国の研究動向の紹介や辞賦研究史の概観といった側面も、本稿には自ずと付与されることになる。

### 一、「通史」と「断代」

日中間の差違として、まずは「通史」と「断代」を挙げたい。これは筆者が最も大きな違いと認識する点でもある。

従来、日本で辞賦研究を志した場合、鈴木虎雄『賦史大要』と中島千秋『賦の成立と展開』をまずは参照することが望まれる<sup>②</sup>。この両書については、すでに中国でも紹介されており、高い評価を受けている<sup>③</sup>。これを見る限り、日本の辞賦研究の充実を看取るこ

とができるかもしれない。しかし、実際にはこの両書以降、日本国内では辞賦学に関する研究書は殆どあらわれていない。更には、鈴木・中島の両書にも問題が内包されているのである。

鈴木虎雄の『賦史大要』は1936年の刊行であり、すでに80年余りを経過している。我々が該書を参照せねばならないのは、日本国内における唯一の「通史」的性質を持つことが大きな要因として存在する。該書は主に賦の性質から分類を行っており、「騷賦・辞賦・駢賦・律賦・文賦・股文賦」に分類する。屈原や宋玉に始まり、前漢の文・景帝期までを「騷賦」、前漢武帝期から魏晋期までを「辞賦」、晋宋から初唐期までを「駢賦」と捉える。また唐宋期における中国の官吏登用試験である科挙に関連した賦作を「律賦」、宋代の散文的特徴を備えた賦作を「文賦」、清代の八股文の方式を用いた賦作を「股文賦」と認識するが如くである。また、該書は賦の構成や形式を重視しており、そのため一定の科学的視点を保持していると言えるが、その一方で内容に関する検討は充分とは言えない。更に、該書が80年余り前の著作であることとも関連して、その叙述方式が文語調であり、現在一般に用いられる書面語とは大きく異なっている。そのため、現代の若年層にはその理解が比較的困難なものとなっている。

中島千秋の『賦の成立と展開』も、同じく辞賦を研究する際に必須とされる研究書である。該書は1963年の出版であり、凡そ半世紀前のものとなる。「賦」字の意味の確認から始まり、春秋戦国時代の遊説家の弁説や『楚辞』の中に「賦」の起源を求めている。そのほかに、漢代の賦作とその発展状況への考察も含まれ、鈴木著に比べて非常に仔細な検討が加えられている。とりわけ「賦」という概念の分析部分は大いに参考に値する。しかし、該書が六朝唐宋以降の辞賦作品に殆ど言及していないという点において「断代」的性質を持つものと定義でき、これを日本の辞賦研究の一つの典型に位置付けることができる。

また近年、高橋庸一郎によって漢賦に着目した『中国文化史上における漢賦の役割』が刊行された。該書は本論九章と附論で構成され、前三章では青銅銘記及び縦横家の弁説から漢賦に至るまでの脈絡を考察し、後六章では絵画・書法・吟詠・漢字など、主に漢賦の中国古代文化に対する影響について論を展開する。

上述の鈴木・中島両書はすでに古典的著作と言え、近年の成果としては高橋著が該当するが、これ以外にも今世紀になって以降、辞賦を考察対象とした研究書が徐々にあらわれるようになってきた。佐竹保子『西晋文学論—玄学の影と形似の曙』は、「玄学」と「形似」という二種類の概念によって、皇甫謐・夏侯湛・張華・束皙・張協・郭璞らの作品を扱っており、この中には張華「鷓鴣賦」、束皙「勸農賦」「貧家賦」「近遊賦」、張協「七命」、郭璞「江賦」など、「賦」に類する作品も多く含まれる。福井佳夫『六朝の遊戯文学』は「遊戯文学」という概念のもと、王褒「僮約」、尹湾漢簡「神烏傳（賦）」、揚雄「逐貧賦」、蔡邕「青衣賦」、曹植「鶴雀賦」など多くの辞賦作品について考察を展開する。渡邊義浩『「古典中国」における文学と儒教』は、著者自身が提唱する「古典中国」という概念に則り、六朝以前の文学と儒教との関係を考察したものであり、その中には揚雄「劇秦美新」、班固「兩都賦」、陸機「文賦」などが含まれる。栗山雅央『西晋朝辞賦文学研究』は、左思「三

都賦」を主な考察対象とした上で、当時の政治と文学創作との関わりを考察すると同時に、漢代から六朝時期までの「都邑賦」の変遷過程について論究したものである。

これらは何れも、中国の辞賦研究の手法とは異なるものであり、それぞれに固有の特徴を持つ。とりわけ、それ以前とは異なる斬新な視点、そして従来は顧みられることのなかった作品や文人に着目する点は、十分に注意されよう。しかし、本節で指摘する差違に鑑みれば、これらの研究が総じて六朝時代以前を主な考察範囲として設定するがために、自ずと「断代」的な研究にならざるを得ないという側面は、遺憾な点として認識されるかもしれない。

一方、中国の辞賦学の研究状況に目を転ずれば、日本とは大きく異なることに気付かされる。すなわち、中国における今世紀の辞賦研究は非常な活況を呈しているのである。このことは中国国内でもすでに学界の共通認識とされており、中でもその学術的価値が確立された研究書も存在しており、先行研究の指摘に従いこれらを以下に列挙する<sup>④</sup>。

- ・馬積高『賦史』（上海古籍出版社、1987年版）
- ・龔克昌『中国辞賦研究』（山東大学出版社、2003年版）
- ・葉幼明『辞賦理論』（湖南教育出版社、1991年版）
- ・何新文・蘇瑞隆・彭安湘『中国賦論史』（人民出版社、2015年版）
- ・許結『中国辞賦理論通史』（鳳凰出版社、2016年版）

まずは、馬積高『賦史』であるが、これはまさしく中国における近代の辞賦研究を切り開いた書物であり、「該書は全面的に先秦から近代までの辞賦が発展した歴史過程に言及したものであり、賦史研究を新たな段階へと推し進めた」<sup>⑤</sup>ものである。この時期の研究状況について、馬自身がその後記にて回顧しているが、時代的影響もあり極めて冷遇されていたと述懐する<sup>⑥</sup>。しかし馬積高著の刊行以降、中国の辞賦研究は発展の一途を辿ることになった。馬著を除く上述の四著のうち、龔・何・許らの著作は総じて今世紀に入ってから研究成果であり、ここにも中国における辞賦学の継続した盛行の様子を看取することができる。またこれらが「通史」的性質を持つことから、日本との差違を自ずと理解することができよう。

龔克昌『中国辞賦研究』は、彼の『漢賦研究』を基礎として発展させたものであり、漢賦が持つ価値の再考、漢賦の発展経路に対する全面的考察、そして中国辞賦史に対する整理を特徴とする。何新文等『中国賦論史』は、書名に「賦論」を冠することからも明らかなように、賦論に重点を置いた上で、漢代から清代にかけて通史的視点から、賦論の歴史的発展過程や内容、その特色や影響などを考察する。因みに、このような「賦論」的視点は、上述した渡邊著の中にも伺える。但し、日本における賦論研究は必ずしも盛んであるとは言いがたく、用いられる資料も揚雄『法言』、班固「兩都賦」序文、曹丕「典論論文」、曹植「与楊徳祖書」、左思「三都賦」序文、皇甫謐「三都賦序」、陸機「文賦」、劉勰『文心雕龍』などが中心である。すなわち、その資料は六朝以前に限定されるとともに、その多くが『文

選』に採録されるものとなっているのである。この点において、日本の辞賦研究が「断代」的であることの顕著な例として位置付けられよう。

最後に、許結『中国辞賦理論通史』であるが、これは上下2冊の大部なものであり、2016年に出版された。内容は上中下の3部で構成され、上篇は「中国辞賦理論総述」と題し、歴代の辞賦理論の展開過程や辞賦理論を批評するための資料、或いは辞賦理論が誕生した各種の背景を明らかにする。中篇は「中国辞賦理論流変」と題し、先秦から現代までの辞賦理論の変遷を総覧し、「前賦論時代・楚辞・漢賦・古賦・律賦・遺産・学科」などに分類し論考を加える。因みに、この中には中国国外の研究状況も概括され、そこでは日本の状況にも触れられている。下篇は「中国辞賦理論範疇」と題し、「本原・経義・体類・章句・技法・風格」といった各種の側面から検討を行っている。

これらは「通史」的の性質を持つ中国での主要な研究成果であるが、「断代」的の性質のものも充実している。六朝時期以前については、程章燦『魏晉南北朝賦史』が、唐代については詹杭倫『唐代科挙与試賦』が、宋代については劉培『兩宋辞賦史』が、金元代については牛海蓉『金元賦史』などがそれぞれ著されており、「通史」と「断代」の何れにおいても非常な充実が確認されよう。

以上、中国は「通史」的研究成果が豊潤に存在するのに対し、日本の研究成果の大部分は「断代」的の性質を備えるものとなっていることが明らかになった。このような状況に鑑みれば、やはり日本の研究状況は比較的薄弱なものと言わざるを得ない。その原因は、多く日本の辞賦研究において「通史」的の性質を持った研究書が極めて乏しい点に求められるのではないかと、筆者自身は考えている。すなわち、上述した鈴木虎雄『賦史大要』は通史的特徴を備えはするものの多分に古典的であり、学部生といった若年層には読み解くことが難しい。一方で、馬積高『賦史』もまた、中国語に習熟していない学生にとっては理解が困難である。こうした背景もあり、日本における辞賦研究が敬遠されてきたのではなかろうか。したがって、日本の辞賦研究の裾野を拡大するためには、「通史」的特徴を備えた概説書の刊行が望まれるところであり、より現実的な方法としては馬積高『賦史』の翻訳を行う必要があるように思われる。

## 二、「広汎」と「狭小」

日中間の辞賦研究における二つ目の差違は、「広汎」と「狭小」である。上述の第一の差違とも通ずるところであるが、これは換言すれば、その研究方向の空間的・時間的・括がりの違いと捉えてもよいと思う。

筆者はこれまで計三度（第九・十二・十三届）国際辞賦学学術研討会に参加してきた。回を重ねるにつれて、中国の辞賦学が対象とする時間的・空間的・括がりが、日本のそれを遙かに凌駕することに気付かされた。以下に示す表1は、筆者が参加した計三度の辞賦学学術研討会で配布された論文集について、時代毎に分類を行ったものである<sup>⑦</sup>。

表1 論文集採録論文の時代別分類

	総論	先秦	兩漢	六朝	隋唐	宋	元	明	清	民国後	域外	楚辞	計
第9届	6	2	14	12	6	4	1	3	6	3	1	3	61
第12届	9	6	20	8	8	5	2	9	8	4	10	3	92
第13届	9	6	22	13	3	5	3	4	5	5	8	12	95
計	24	14	56	33	17	14	6	16	19	12	19	18	248

上掲の表1より見れば、この三度の学会においてやはり六朝以前の研究が比較的多数を占めるものの、隋唐以後の研究も同様に一定の数量を保っていることに気付かされよう。試みに『第十三届国際辞賦学学术研究会論文集』を例として、隋唐以後を研究対象としたものを幾つか抜粋すれば、次のようなものが挙げられる。

- ・牛海蓉「元明兩朝辞賦復古之差違」
- ・許東海「体物与博物：元代耶律鑄以譜為賦の家学系譜及其賦学進路」
- ・黄水雲「固本与致孝：唐・宋賦作中藉田題材書写」
- ・呂双偉「“駢四儷六”与元明清賦学的演变」

これらを見た場合、唐宋元明清が研究対象に据えられることから、その時代的拡がりを顕著にみて取れる。また、その研究の多くは時代や主題といった比較的大きな枠組を設定した上で、単一乃至複数の時代に跨って作品を博搜する傾向が強いと言える。日本においては六朝時代が中心であることも相俟って、複数の時代に跨って研究が展開されるということ自体が極めて稀である。

そして近年徐々に増加傾向にあるのが、中国大陸以外の所謂「域外」の辞賦作品を対象とした研究である。以下に同じく例を挙げる。

- ・郭建勳・邱燕「日本平安初期漢文「重陽節神泉苑賦秋可悲」九首初探」
- ・龔紅林「韓国賦学三題」
- ・阮怡「流動的風景与文化記憶—韓国漢詩中的赤壁書写」
- ・劉秀秀「朝鮮朝詠物賦研究」
- ・王准「檳榔賦与檳榔文化—兼談跨太平洋・印度洋的檳榔文化帶」

近年、上述のように「域外」を対象とした辞賦研究が以前に比べて盛んになってきているが、これは張伯偉の主導する「域外漢籍研究」の出現が影響を及ぼしたものと考えてよい<sup>⑧</sup>。このように、中国の辞賦研究は先秦から近代まであらゆる時代に跨って展開され、かつその方法も「賦学・賦論」といった大きな枠組を設定した上で行われる傾向が強い。但し、問題意識が大きな反面、その論が浅薄になるものもまま見られる。

一方、日本の研究状況に目を向ければ、その対象は中国に比べて時間的にも空間的にも

「狭小」なものと位置付けることができる。その上で特徴を定義すれば、次のようにまとめることができよう。第一に、主要な研究範囲が六朝時代以前に限定されることである。この点はすでに指摘されるところであるが、その中で日本の辞賦研究の中で頻繁に用いられる名称を分析した上で、先行研究で以下のようにまとめている<sup>99</sup>。すなわち、「賦・帰去来兮・陶淵明・庾信・漢賦・文賦・阮籍・辞賦・宋玉・司馬相如・曹植・謝靈運・三都賦」がそうである。但し、これは1950年から2010年を対象とした分析結果であるため、今世紀に限定した場合には、そのキーワードも異なる部分が生じてくる。そこで、2000年から2018年に発表されたものを対象として、人名と作品名別に論文題目中での出現回数順に排列したものが、以下の表2及び表3である<sup>100</sup>。

表2 出現頻度の高い人名

庾信	11	謝靈運	5	左思	4
陶淵明	10	菅原道真	5	王褒	4
曹植	8	張衡	5	杜甫	3
陸機	8	鮑照	5	都良香	3
揚雄（楊雄）	8	司馬相如	5	韓愈	3

上掲の表2より見れば、人名の出現傾向は先行研究が指摘するところと概ね同様であり、その大部分も六朝時期以前の文人となっている。但し、ここで注目すべきは、「菅原道真」と「都良香」の2名の日本人が挙がっている点である。これは先に述べたとおり、近年注目を浴びる「域外漢籍研究」の影響の結果として認識されるべきであろう。しかしながら、これらの日本人が創作した辞賦作品に対する研究の殆どは中国人研究者によるものであり、日本人による日本の辞賦研究はやはり比較的少ない状況にあると言える<sup>101</sup>。ついで、表3を確認する。

表3 出現頻度の高い作品名

漢賦	9	律賦	5	思旧賦	3
帰去来兮辞	8	游天台山賦	5	洗硯賦	3
三都賦	7	蕪城賦	4	山居賦	3
文賦	7	閑情賦	4	蜀都賦	3
洛神賦	6	小園賦	3	二京賦ほか	2

上掲の表3より見れば、人名の出現傾向と同じく、これも先行研究の指摘と概ね一致する。また、各作品における研究者の多寡については、「帰去来兮辞」と「文賦」が比較的

多いほかは、それぞれ1、2名を数えることができるほどである。ここでは「律賦」と「洗硯賦」に注目したい。「律賦」とは唐代以後に科挙と関連して出現した形式であり、「洗硯賦」が日本の平安時代の文人である都良香の手になる作品であることに鑑みれば、一見すると近年の日本においても、中国と同様に唐宋以後や域外に対する辞賦研究が重視されているように感じられる。しかしながら、これらも先の人名での傾向と同じく、その多くが中国人研究者によって展開されるものである<sup>12)</sup>。

第二に、日本における主な研究方式が、それぞれ作品単体を対象とするものであり、中国と同じような「賦学・賦論」の性質を持つ研究が極めて少ない点を指摘することができる。表2と表3を組み合わせることで、次のような定義が可能となろう。すなわち、日本の辞賦研究は基本的に「一人の文人とその代表作」を主な考察対象と看做した上で論が構成されると考えられるのである。上掲の表をもとに具体例を示せば、陶淵明と「帰去来兮辞」「閑情賦」、曹植と「洛神賦」、陸機と「文賦」、左思と「三都賦」、鮑照と「蕪城賦」、謝靈運と「山居賦」といった具合である。また、これらの作品の多くが『文選』に収録される作品である点にも注意が必要であろう。陶淵明「閑情賦」と謝靈運「山居賦」を除いたものが『文選』に採録される。このように、日本の辞賦研究の大部分は『文選』を筆頭に、『古文真宝』や『本朝文粹』といった日本と中国の歴代の総集に収録される作品に対してが中心であり、文人個人の別集に収められる作品に対しては、却って比較的少ない状況にあると言ってよい。つまり、日本の辞賦研究は、ある特定の文人の代表作、それも総集に収録されるものに依拠して展開されてきたと定義づけることが可能なのである。

総じて、中国の辞賦研究と比較してみれば、日本における研究状況は、上述した二つの方面で「狭小」なものと認識して差し支えなからう。事実、日本では今世紀に入ってもなお、研究の中心は六朝時代以前であり、唐宋以降の辞賦研究は盛行しているとは言い難い状況である。しかしながら、これは日本の研究に価値がないことを意味するものではないことも、同時に強調しておきたいと思う。日本の研究にも中国の学界にはない視座を持つものを認めることができるのである。

まず、中国とは異なる視座から展開される研究がある。例えば、佐々木聡・高橋（旧姓前原）あやのの研究は、それぞれ「天元玉曆祥異賦」や張衡「思玄賦」を対象としつつ、何れも天文五行思想との関わりから考察を加えたものであり、中国の学界においてこれらの関係性を指摘するものは比較的少ない<sup>13)</sup>。次に、中国での研究を補足発展させたものがある。例えば、栗山雅央は中国では未だ十分に注目を浴びているとは言い難い「賦注」に着目して研究を展開する<sup>14)</sup>。「賦注」については専論も少なく<sup>15)</sup>、また上述した許結・程章燦著にも分析は加えられるものの、比較的概論的内容に終始しており<sup>16)</sup>、これを体系的に論じたものは少ない。このように、近年の日本の学界も徐々にではあるが、それぞれに独自の視点に基づき研究されつつある。因みに、中国の学界における日本の学界に対する理解は比較的古いと言ってよいように思われるため<sup>17)</sup>、これら近年の日本の研究成果についても中国に対してより積極的に紹介を図る必要があるだろう。

### 三、「辞」と「賦」

日中間の辞賦研究の三つ目の差違は、「辞」と「賦」である。但し、これは前節までに述べてきたような根本的な相違をあらわすのではなく、「辞」と「賦」の研究状況について、日中間で時期的隔たりが見られたので、あえて一項を設けたものである。因みに、先行研究において、日本の辞賦研究は「辞」と「賦」の境界が不明瞭であるとする指摘もあるが、これは必ずしも当たらない<sup>18</sup>。例えば、日本の『楚辞』研究の大家である藤野岩友・竹治貞夫・星川清孝・赤塚忠・石川三佐男・小南一郎らは、『楚辞』に関する著作は認められるものの<sup>19</sup>、「賦」に対する全面的考察は行っていない。一方、日本で「賦」を研究対象としてきた藤原尚・小尾郊一<sup>20</sup>・森野繁夫<sup>21</sup>・佐竹保子・釜谷武志<sup>22</sup>らも同じく、「辞」に対する全面的考察は行っていない。先行研究では稲畑耕一郎<sup>23</sup>・谷口洋<sup>24</sup>らを例示するが、辞賦研究全体から見渡した場合、稀有な例と位置付けるべきであるように思われる。このように、日本の学界においても「辞」と「賦」とは比較的明確に境界線が引かれた上で研究されてきたと看做すことができよう。

では、日本における辞賦研究の特徴はどのようなものと定義することができようか。筆者は「辞」と「賦」の区別を、『楚辞』と『文選』との別に代替できる点にこそ求められるのではないかと考える。具体的には、日本における「賦」研究に供される材料の大部分が『文選』に収録されることで説明が可能であるということであり、この点はすでに前節でも述べてきたとおりである。例として、藤原尚の諸研究について見てみれば、二十篇を超える「賦」に関する論考を発表するが、その多くにおいて研究対象が『文選』採録作品によっているのである<sup>25</sup>。また、「賦」を『文選』に代替することが可能であるという見方は、次の点によっても傍証が可能であるように思われる。すなわち、日本における初期の「賦」研究が広島大学によって主導されたという事実によってである。言うまでもなく、広島大学は日本の『文選』学を先導した一大研究拠点であり、これは現在も継続されている。上述の賦学研究者として列挙した藤原・小尾・森野らは何れも広島大学に所属しており、当時の「賦」と『文選』との強固な結び付きの様子が窺われよう。このように、『文選』によって「賦」研究が進められる状況というのは、今世紀に入っても概ね同様である。今世紀以降、「賦」に関する論文を5篇以上発表した研究者として、森野繁夫・谷口洋・上原尉暢<sup>26</sup>・鈴木崇義<sup>27</sup>・馮芒・栗山雅央がいるが、中でも上原・鈴木・栗山らは、主に『文選』に収められる作品に取材して論を構築している。

以上のような見方とは別に「辞」と「賦」の研究の流行状況に目を向ければ、今世紀以前と以後でその状況を異にするとと言える。20世紀の状況を回顧すれば、「辞」、これは主に『楚辞』を指すが、この研究がより盛んであったと言え、このことは上述の『楚辞』に関する研究書の充実にも見て取れる。しかし、近年では徐々に「賦」に関する研究、とりわけ『文選』収録作品に取材しないものも増加傾向にあり、論文数の上では『楚辞』に関するものを超える状況にある。したがって、今世紀以前と以後とは、その研究状況が逆転しつつあると認識することができる。

では、このような日本の研究状況は、中国の辞賦研究の状況と比較した際にどのように

位置付けられようか。中国の近現代の辞賦学の学術発展の道程について、次のような指摘がある<sup>28</sup>。すなわち、1919～1949年の「転型与開啓」期、1950～1979年の「起伏」期、1980～2000年の「復興」期、2001～2010年の「繁榮」期とするが如くである。このような中国における辞賦学研究の発展過程に鑑みれば、日本のそれは比較的遅れたものと言うことができ、まだ「繁榮」と言えるほどの充実は見出せない。2000年代初頭が比較的「停滞」していた状況であると言えるのであれば、近年の状況は「復興」と呼ぶに相応しい時期と認識すべきではなかろうか。近年の「賦」に対する注目の高まりを意識すれば<sup>29</sup>、今後この注目を一過性のものとするのではなく、より強く推進していかねばならないと言えよう。

#### 四、「整理」と「未整理」

日中間の辞賦研究に見える四つ目の差違は、「整理」と「未整理」である。これは主に日中両国の研究環境より見た違いである。端的に言えば、近年来中国や台湾において盛んに辞賦に関する総集や選集、或いは文献が編纂されているが、このような研究成果の恩恵を日本の学界は充分に享受できているとは言い難い状況にあるのである。

実際、日本において六朝時代以前を研究する際には、一般には前節までもすでに指摘した『文選』を筆頭に『玉台新詠』といった詩歌総集、或いは『史記』『漢書』『宋書』といった正史を用いることが多い。または遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』や嚴可均『全上古三代秦漢三国六朝文』を用いるのが常である。更に辞賦を研究する際には、特に陳元龍『歷代賦彙』が比較的参照すべき資料として知られる。このように見た場合、日本での辞賦研究乃至六朝文学研究においては、基本的には歴代の総集や史書に基づいてなされてきたと考えてよいように思われる<sup>30</sup>。一見すれば、これでも充分であるように感じられるが、近年の中国の状況に目を転ずれば、上述した『歷代賦彙』のほかにも、陸続と辞賦の総集や選集が編纂されてきているのである。以下に、幾つか具体例を示す。

- ・馬積高編『歷代辞賦総匯』（湖南文芸出版社、2014年版）
- ・鴻宝齋主人編『賦海大觀』（北京図書館出版社、2007年版）、清代光緒二十年（1894）上海鴻宝齋石印袖珍本の影印版。
- ・趙達夫編『歷代賦評注』（巴蜀書社、2010年版）
- ・費振剛編『全漢賦評注』（広東教育出版社、2005年版）
- ・龔克昌・周広璜編『全三国賦評注』（齊魯書社、2013年版）
- ・張大偉・陳慶元・江承華編『漢魏六朝辞賦選』（太白文芸出版社、2014年）
- ・簡宗梧・李時銘編『全唐賦』（里仁書局、2011年版）

ここに挙げたものがすべてではないが、少なくとも今世紀に入って以降に多くの辞賦総集及び選集が編纂されているという現状は把握できよう。中でも特に注目したいのが、馬積高主編による『歷代辞賦総匯』である。馬積高は上述した『賦史』の著者でもあるが、

彼を中心として編まれた一大辞賦総集が該書である。該書は総計 26 冊で構成され、先秦から清末までを対象とし、収録作品は計 30789 篇を数え、作者数は 7391 名となる。1995 年に編纂が開始され 2013 年末に印刷されたので、凡そ 20 年の歳月が費やされたことになる。その内容を略述すると次のようになる。第 1 冊、先秦漢魏晉南北朝卷。第 2・3 冊、唐代卷。第 4 冊、宋代卷。第 5 冊、金卷。第 6～9 冊、明代卷。第 10～23 冊、清代卷。第 24 冊、詳目卷。第 25・26 冊、索引卷。以上のような構成であるが、日本で比較的常用される『歴代賦彙』に収録される作品数が 4161 篇であることと比べれば、『歴代辞賦総匯』の収録作品数は約 8 倍となっていることがわかる。また鴻宝齋主人編『賦海大観』も、『歴代賦彙』と比べると多く作品が収録されている。そうなれば、当然のこととして辞賦研究の基礎資料に供されるべきであるが、大変遺憾なことに、現在日本の研究機関で『歴代辞賦総匯』を収蔵するのは 3 箇所、『賦海大観』も同じく 4 箇所に過ぎず、ここからも日本の辞賦研究の環境が完備していないことが容易に推察されよう<sup>30)</sup>。

これ以外にも、近年中国において辞賦研究の基礎的文献となり得る『歴代賦学文献輯刊』という大部な書籍が刊行された。該書は踪凡・郭英徳編で、総計 200 冊の中に 213 種類の歴代の賦学に関する文献が収録されている。ここで述べる「賦学文献」について、編者はその凡例で「賦総集・賦別集・賦論・賦注」と定義する<sup>31)</sup>。「賦総集・賦別集」は辞賦作品の本文そのものであるし、「賦論・賦注」は辞賦作品の後世の受容や理解を示したものである。つまり、辞賦の創作と受容の両面から辞賦に関する文献を博搜しているのである。但し、これは極めて高額である事情も影響してか、日本の研究機関で収蔵している場所は管見の限りではなさそうである。

また、近年の中国本土を除く地域の辞賦研究の状況を見ると、許俊雅と呉福助による『全台賦』と『全台賦校訂』の出版が注目される。該書は清代以後の台湾に地縁を持つ文人によって創作された、台湾と関係する辞賦作品を取めたものであり、作者数は 90 余人で作品数は 196 篇となる。該書の出版以降、台湾に関する辞賦研究が徐々に盛んになりつつあることは、辞賦学学術研討会への参加などを通じて体感するところである<sup>32)</sup>。そのほか、朝鮮において創作された辞賦作品に着目すれば、李氏朝鮮時代に編纂された『東文選』を挙げることができる。該書は計 130 巻であり、辞賦に関しては 3 巻を占めるに過ぎないものの、これに対する研究は徐々に増加傾向にある<sup>33)</sup>。このように、中国本土以外の土地で創作された辞賦作品に対する研究が注目を浴びつつある様子が見て取れようが、上述した日本人が創作した辞賦作品に対する研究があらわれ始めたことも、こうした状況の中に位置付けることで説明が可能となる。但し、日本人創作辞賦に対する研究は、未だ平安時代の文人に限定されており、明治期に至るまで辞賦作品が継続して創作されている事実を鑑みるに<sup>34)</sup>、決して充実しているとは言い難い状況にある。台湾における『全台賦』の編纂がその研究の契機となったことを考慮に入れるならば、日本人創作の辞賦作品の総集編纂が目指されて然るべきであろうし、これを日本国外に広く周知していくことで、日本の辞賦研究をより充実させることが可能となるように思われる。

以上、辞賦の研究環境については、中国で今世紀になってから数多くの辞賦総集や選集、

或いは賦学に関する文献が編纂され刊行されていることが確認できた。一方で、日本においてはこれらの研究乃至整理の成果が充分には享受できていないことも明らかになった。また、日本人創作辞賦に対する総集といった日本の辞賦を研究する基礎資料が完備されていない現状に鑑みれば、これらを整理発表することは、従来は「未整理」な状況にある日本の研究環境の「整理」化を目指す点において、一定の価値が見出せるように思われる。

## 小 結

以上に述べてきたとおり、日本と中国の間では辞賦研究という同一主題への取り組みであっても、幾つかの差違が存在することが明らかになった。その原因の多くは、辞賦研究に関連する資料の刊行とその接受という、謂わば研究環境の差に負うところが大きいと言えよう。辞賦研究に限られるものではなかったため本稿では詳述しなかったが、インターネット上での情報公開においても、両国では大きな隔絶が存在し、これもまた大きく影響していると言えよう。しかし、このような状況下にあっても、上述してきたように近年では徐々に辞賦研究の成果が増加しつつあるし、その研究視点も中国とは一線を画するものである。このような発展の兆しをより確かなものにするためにも、すでに述べたことではあるが、馬積高『賦史』の翻訳や「通史」的性質を持つ概説書の編纂、そして日本人創作辞賦作品の総集の編纂が図られるべきであるように思われる。そうすることで、日本における辞賦研究の裾野がより拡大されていくであろうことが期待される。

また、筆者自身の体験を通して感じたことを付言すれば、日本人の、特に若手研究者はより機会を求めて国外で開催される国際会議へ積極的に参加すべきであろうと思う。筆者は近十年ほど、文選学や辞賦学を中心に十度を超えて国際会議へと参加してきたが、その多くで日本人研究者の参加は非常に少なく、またその参加者も固定化される傾向にあった。こうした国際会議への参加を通じて、開催される会議毎に研究動向の趨勢が如実に反映されていることや、日本の学界との興味関心の違いにも気付かされること度々である。中国の学会では時代・文体・文人などの別にしたが日本よりも細分化されており、こうした特定の総集や文体に限定される国際会議であるからこそ、より深刻な啓発を受けることにも繋がると筆者自身は考えている。

本稿でこれまでに述べてきたことも、国内で研究を続けてきただけでは恐らくは気付き得なかったであろう。そうした意味において、論文を通じた書面上での交流が重要であることはもちろんのこと、対面を通じた人的交流が盛んに行われることも、今後の学界の発展に大きく寄与するであろうと確信する次第である<sup>36)</sup>。

## 参考文献一覧

本稿で挙げた研究書について、参考として日文と中文に分けたうえで、以下に出版年にしたがい列挙する。なお、論文については、注中に提示してここで挙げることはしていない。また、あくまで本稿で挙げたもののみの一覧であり、近年の研究状況を網羅したわけではないことを先にことわっておく。

### 日 文

- 鈴木 虎雄 『賦史大要』(富山房、1936年)  
藤野 岩友 『巫系文学論』(大学書房、1951年。増補版、1969年)  
星川 清孝 『楚辞の研究』(美徳社、1960年)  
中島 千秋 『賦の成立と展開』(関洋紙店印刷所、1963年)  
竹治 貞夫 『楚辞研究』(風間書房、1978年)  
赤塚 忠 『赤塚忠著作集6 楚辞研究』(赤塚忠著作集刊行会編、研文社、1986年)  
石川三佐男 『楚辞新研究』(汲古書院、2002年)  
佐竹 保子 『西晋文学論—玄学の影と形似の曙』(汲古書院、2002年)  
小南 一郎 『楚辞とその注釈者たち』(朋友書店、2003年)  
福井 佳夫 『六朝の遊戯文学』(汲古書院、2007年)  
高橋庸一郎 『中国文化史上における漢賦の役割』(晃洋書房、2011年)  
渡邊 義浩 『「古典中国」における文学と儒教』(汲古書院、2015年)  
牧角 悦子 『経国と文章—漢魏六朝文学論』(汲古書院、2018年)  
高橋あやの 『張衡の天文学思想』(汲古書院、2018年)  
栗山 雅央 『西晋朝辞賦文学研究』(汲古書院、2018年)

### 中 文

#### (研究書)

- 馬 積 高 『賦史』(上海古籍出版社、1987年版)  
龔 克 昌 『漢賦研究』(山東文芸出版社、1990年版)  
葉 幼 明 『辞賦理論』(湖南教育出版社、1991年版)  
程 章 燦 『魏晋南北朝賦史』(江蘇古籍出版社、1991年版。修訂2001年版)  
馬 積 高 『歴代辞賦研究史料概述』(中華書局、2001年版)  
龔 克 昌 『中国辞賦研究』(山東大学出版社、2003年版)  
何新文・蘇瑞隆・彭安湘 『中国賦論史』(人民出版社、2012年版)  
劉 培 『兩宋辞賦史』(山東人民出版社、2012年版)  
詹 杭 倫 『唐代科挙与試賦』(武漢大学出版社、2015年版)  
牛 海 蓉 『金元賦史』(人民出版社、2015年版)  
許 結 『中国辞賦理論通史』上下冊(鳳凰出版社、2016年版)

## (文献資料)

- 嚴可均 『全上古三代秦漢三國六朝文』(中華書局、1956年版)  
遼欽立 『先秦漢魏晉南北朝詩』(中華書局、1983年版)  
陳元龍 『歷代賦彙』  
(江蘇古籍出版社・上海書店、1987年版。ほかに鳳凰出版社、2004年版もある)  
張大偉・陳慶元・江承華 『漢魏六朝辭賦選』(太白文芸出版社、2004年版)  
費振剛 『全漢賦校注』(広東教育出版社、2005年版)  
許俊雅・呉福助 『全台賦』(国家台湾文学館籌備処、2006年版)  
鴻宝齋主人 『賦海大觀』(北京図書館出版社、2007年版)  
趙達夫 『歷代賦評注』(巴蜀書社、2010年版)  
簡宗梧・李時銘 『全唐賦』(里仁書局、2011年版)  
龔克昌・周廣璜 『全三國賦評注』(齊魯書社、2013年版)  
馬積高 『歷代辭賦總匯』(湖南文芸出版社、2014年版)  
許俊雅・呉福助 『全台賦校訂』(国立台湾文学館、2014年版)  
踪凡・郭英德 『歷代賦学文献輯刊』(国家図書館出版社、2017年版)

## 注

- ① 近年の辭賦学研究に関する紹介については、谷口洋「国際辭賦学学术研討会について一あわせて辭賦研究の動向にふれて」(『中国文学報』72、2006年)と山内良太「海外学会参加報告 第十届国際辭賦学学术研討会」(『大東文化大学中国学論集』30、2012年)がある。
- ② 本稿で提示する研究書に関する書誌情報については、本稿末尾の参考文献一覧に記載しているので、こちらを参照されたい。
- ③ 許結『中国辭賦理論通史』上冊(鳳凰出版社、2016年版)、第2章第2節「現代的辭賦理論文献」を参照。なお、日本の辭賦研究の状況については、同書下冊、第12章第4節「海外漢学中的賦論」及び季鄭秋・陳亮「日本賦学論著的統計与分析(1950—2010)」(『第十三届国際辭賦学学术研討会論文集』、中国辭賦学会・湖南大学文学院・湖南大学辭賦研究所、2018年)にも論じられる。
- ④ 踪凡・郭媛「当代賦学經典略述」(『遼東学院学报(社会科学版)』、第21卷第1期、2019年)を参照。
- ⑤ 同上。
- ⑥ 馬積高『賦史』(上海古籍出版社、1987年版)、「後記」を参照。
- ⑦ 表の作成にあたっては、『第九届国際辭賦学学术研討会論文集』(泉州師範学院、2011年)、『第十二届国際辭賦学学术研討会論文集』(湖北大学・三峡大学、2016年)、『第十三届国際辭賦学学术研討会論文集』(湖南大学、2018年)を参照した。なお、二つの年代に跨がるものについては主と思われる時代へ、複数の年代に跨がるものについては

総論へと分類を行った。

- ⑧ 「域外漢籍研究」については、張伯偉主編『域外漢籍研究集刊』が中華書局より2005年に創刊され、同『域外漢籍研究叢書』が中華書局より2007年に第1輯が刊行されている。
- ⑨ 季鄭秋・陳亮「日本賦学論著的統計与分析（1950—2010）」（『第十三届国際辞賦学術研討会論文集』、中国辞賦学会・湖南大学文学院・湖南大学辞賦研究所、2018年）を参照。
- ⑩ 表2及び表3については、主に2000年から2018年に発表された論文を調査の対象とした。紙幅の都合で調査結果としての論文目録を掲載することができないが、今後何らかのかたちでの公開を予定している。
- ⑪ 中国人研究者による論考として、馮芒「日本の律賦の発生—都良香「洗硯賦」「生炭賦」を中心に—」（『水門』26、2015年）、同「都良香「洗硯賦」と『後漢書』」（『外国文学研究』16、2015年）、同「都良香「洗硯賦」と張芝の故事」（『外国語学雑誌』44、2014年）などを挙げるができる。
- ⑫ 注①に示したもののほかに、馮芒「菅原道真と唐代律賦との接触の一端：「奉謝平右軍」詩を中心に」（『東アジア比較文化研究』16、2017年）、同「平安朝律賦の述作制限について」（『東アジア比較文化研究』14、2015年）が中国人研究者による研究成果として挙げられる。また日本人研究者によるものとしては、三木雅博「菅原道真の「端午日賦 艾人」詩と唐人陳章の「艾人賦」：平安朝における唐代律賦受容の一端」（『梅花日文論叢』22、2014年）や秋谷幸治「中唐の律賦をめぐる文學論—白居易とその同時代人の律賦観について」（『大東文化大学中国学論集』26、2008年）などが挙げられるのみである。
- ⑬ 佐々木聡「「天元玉曆祥異賦」の成立過程とその意義について」（『東方宗教』122、2013年）、同「越南本『天元玉曆祥異賦』について：文五行占書伝播の一例として」（『汲古』72、2017年）、高橋あやの『張衡の天文学思想』（汲古書院、2018年）を参照。
- ⑭ 栗山雅央『西晋朝辞賦文学研究』（汲古書院、2018年）、同「關於「幽通賦」曹大家注的學術性所在」（『中国『文選』学研究会暨「百年選学：回顧与展望」国際學術研討会論文集』、北京大学、2018年）を参照。
- ⑮ 「賦注」に関する専論としては、踪凡「東漢賦注考」（『文学遺産』2015年第2期）などがあるが、その数量は必ずしも多くない。
- ⑯ 賦注に関する概論としては、許結『中国辞賦理論通史』上冊（鳳凰出版社、2016年版）、第3章第3節「賦序、題跋及注釈」及び程章燦『魏晉南北朝賦史』（江蘇古籍出版社、2001年版）、第2節（5）「賦注：形態与意義」などがある。
- ⑰ 許結『中国辞賦理論通史』上冊（鳳凰出版社、2016年版）、第12章第4節「海外漢学中的賦論」を参照。
- ⑱ 季鄭秋・陳亮「日本賦学論著的統計与分析（1950—2010）」（『第十三届国際辞賦学術研討会論文集』、中国辞賦学会・湖南大学文学院・湖南大学辞賦研究所、2018年）を参照。
- ⑲ 本稿末尾の参考文献一覧を参照されたい。

- ⑳ 小尾郊一「左思の賦観—魏晋の賦に於ける写実精神」(『広島大学文学部紀要』15、1959年。後に同『真実と虚構—六朝文学』〔汲古書院、1994年〕に収録。)、同「庾信の人と文学—「江南を哀しむ賦」を中心として」(『広島大学文学部紀要』23、1964年)、同「陸機の文賦の意図するもの」(『広島大学文学部紀要』28、1968年)などがある。
- ㉑ 森野繁夫「庾信「哀江南賦」訳注」(『中国古典文学研究』4、2006年)、同「庾信「小園賦」について」(『安田女子大学大学院文学研究科紀要』12、2006年)、同「庾信「哀江南賦」について」(『中国学論集』44、2007年)、同「褚遂良と庾信「枯樹賦」」(『中国学論集』46、2007年)などがある。
- ㉒ 釜谷武志「「帰去来兮辞」の「辞」について」(『中国文学報』61、2000年)、同「詩と賦のあいだ」(『未明』21、2003年)、同「自己を語る賦:班固「幽通賦」を中心に」(『中国文学報』89、2017年)などがある。
- ㉓ 稲畑耕一郎「賦の小品化をめぐる(上) —賦的表現論(一)」(『中国文学研究』1、1975年)、同「賦の小品化をめぐる(下) —賦的表現論(二)」(『中国文学研究』2、1976年)、同「宋玉集補説—『宋玉子』から『宋玉集』へ」(『中国文学研究』7、1981年)などがある。
- ㉔ 谷口洋「賦に自序をつけること—兩漢の交における「作者」のめざめ」(『東方学』119、2010年)、同「漢末魏晋における賦序の盛行—文学テキストの整備と「文学の自立」」(『六朝学術学会報』11、2010年)、同「巫山の朝雲:宋玉賦の不定型さをめぐって」(『叙説』40、2013年)などがある。
- ㉕ 藤原尚「「幽通の賦」の性命について」(『広島女子大学文学部紀要』14、1979年)、同「班固の賦観」(『広島大学文学部紀要』41、1981年)、同「子虚・上林賦の修辞—ことばの新しさ」(『広島大学文学部紀要』43、1983年)、同「西都賦と西京賦における表現の相異」(『中国文学語学論集:古田教授退官記念』、古田敬一教授退官記念事業会、1985年)、同「「兩都の賦」の創作意図について」(『中国中世文学研究四十周年記念論文集』、2001年)などが、その考察対象を『文選』採録作品によったものである。
- ㉖ 上原尉暢「王褒「洞簫賦」における自然描写をめぐる」(『東北大学中国語学文学論集』16、2011年)、同「王褒「洞簫賦」をめぐる:音楽描写を中心に」(『集刊東洋学』107、2012年)、同「王褒「聖主得賢臣頌」について」(『集刊東洋学』115、2016年)などがある。
- ㉗ 鈴木崇義「班彪「北征賦」小考」(『国学院大学大学院紀要、文学研究科』38、2006年)、同「曹植「洛神賦」小考」(『中国古典研究』53、2008年)、同「張衡「二京賦」小考」(『国学院中国学会報』58、2013年)などがある。
- ㉘ 何新文、彭安湘「新世紀十年中国賦学研究論綱」(『第九届辞賦学国際学術研討会論文集』上冊、泉州師範学院、2011年)を参照。
- ㉙ 『日本中国学会報』67(2015年)には、牧角悦子「賈誼の賦をめぐる」と嘉瀬達男「『漢書』芸文志、詩賦略と前漢の辞賦」の2篇の「辞賦」に関する研究が採録される。なお、牧角論文は、同『経国と文章—漢魏六朝文学論—」(汲古書院、2018年)に採録される。

また、嘉瀬達男は揚雄を中心に前漢の辞賦を研究しており、同「楊雄「蜀都賦」訳注」（『学林』51、2010年）、同「楊雄「反離騷」を読む」（『言語センター広報』19、2011年）、同「楊雄「蜀都賦」と都邑賦」（『小樽商科大学人文研究』126、2013年）などがある。

- ③⑩ なお、『全上古三代秦漢三国六朝文』、『先秦漢魏晋南北朝詩』、『歴代賦彙』については、現在凱希メディアサービスより『雕龍古籍全文検索叢書』として電子テキストが販売されている。
- ③⑪ 『歴代辞賦総匯』を収蔵するのは、関西大学図書館、京都大学文学研究科図書館、名古屋大学文学図書館であり、『賦海大観』を収蔵するのは、大谷大学図書館、富山大学付属図書館、奈良女子大学学術情報センター、仏教大学附属図書館である。参考ciniibooks (<https://ci.nii.ac.jp/ncid/BB16086301>、最終閲覧日 2019/02/08。 <https://ci.nii.ac.jp/ncid/BA84754201>、最終閲覧日 2019/02/08)。
- ③⑫ 『歴代賦学文献輯刊』は日本での収蔵機関がないため、筆者未見である。そのため、その凡例を確認するに際しては、以下の中国のウェブサイトを参照せざるを得なかった ([http://www.sohu.com/a/161713533\\_670305](http://www.sohu.com/a/161713533_670305)、最終閲覧日 2019/02/12)。
- ③⑬ 例えば、欧天発「清代台湾鳳山県諸賦的環境描写」（『第十三届国際辞賦学學術論文集』下冊、湖南大学、2018年）などは、多く『全台賦』『全台賦校訂』を用いて論考する。
- ③⑭ 『東文選』所収の辞賦類作品について、中国国内においては、田帥「漢賦在朝鮮半島の伝播与接受」（中国海洋大学碩士論文、2014年）や褚大慶「『東文選』文体研究」（延辺大学博士論文、2013年）、陳彝秋「論中国賦学的東伝—以『東文選』辞賦的分類与編排为中心」（『南京師大学報（社会科学版）』、2010年版）などがある。日本国内では、栗山雅央「『東文選』所収の辞賦類作品について」（『中国文学論集』46、2017年）がある。
- ③⑮ 例えば、幕末明治初期の政治家である副島種臣は、その別集である『蒼海全集』（『副島種臣全集1（著述篇1）』、慧文社、2004年）の中に、19篇もの辞賦作品を収録している。
- ③⑯ 本稿では、特に日中両国の社会政治背景を考察することはしなかったが、両国の研究状況は多分に当時の社会政治状況の影響を反映したものとなっており、このことは馬積高『賦史』の「後記」からも読み取れる。辞賦研究史をまとめるに際してはこの点も重視すべきであるが、本稿では紙幅の都合で言及しなかった。

・本研究は JSPS 科研費 18K12309 の助成を受けたものです。